

独立行政法人国立文化財機構外部評価委員会報告書

—平成 20 年度—

独立行政法人国立文化財機構外部評価委員会

目次

1. 外部評価委員会報告 1
2. 外部評価委員会博物館調査研究等部会報告 7
3. 外部評価委員会研究所調査研究等部会報告 17

はじめに

本委員会では、機構の自己点検評価を全体として適切に自己点検評価が行われているかをはじめとして、統合による事業の相乗効果、効率的な運営などについて、客観性のある評価に努めた。

なお、収入・支出の決算については、決算途上であることから概要を評価するにとどめ、本委員会の審議から除外した。これは、現状の評価スケジュールを考えるといたしかたない面があるが、独立行政法人の評価を担当する関係機関に対し適正な自己点検評価ができる十分な期間確保を働きかける必要があるとともに、暫定版で差し支えないので、財務状況がわかる財務諸表の要約版と予算等との比較表の作成が間に合うよう一層の努力を要望する。

総 評

独立行政法人国立文化財機構の20年度の実績は全体として高く評価でき、自己点検評価も概ね適正に行われていると評価できる。特に、日本の文化財を守るために、文化財の収集、修理や文化財に関する調査・研究の実施や歴史・伝統文化の国内外への発信については、ナショナルセンター機能を担う国立文化財機構として、その実績が高く評価できる。

数値目標の設定や評価基準については19年度に比して改善されているが、その数値の基準が必ずしも明確ではなく、各担当者の裁量により数値を算出しているものもある。今後は、基準を本部で統一するなど、より明確な評価基準を設ける必要がある。

国立文化財機構は国立博物館と文化財研究所が統合して2年目であるが、それぞれの独自性を活かすとともに、共同研究などの連携した事業の実施を期待したい。特に調査研究・ナショナルセンターとしての取組みは相互の協力が不可欠な事業である。お互いの専門性を活かした連携を期待する。また、それぞれの施設における知見を他の機構内の組織にも広めるよう努めてほしい。

今後は、国内外問わず文化財についてのナショナルセンターとしての役割がより求められるようになるので、その期待に応えられるよう基礎研究及び応用研究にしっかりと取り組んで、質の高い運営を実施していくことを期待する。

I 国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置

1 歴史・伝統文化の保存と継承の中心的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承

収蔵品の整備、次代への継承については、概ね適正に行われており、自己点検評価も妥当であると評価する。

文化財の収集については、各博物館とも運営費交付金が増えない中で有形文化財のより一層の整備を進めるための努力がなされている。特に、京都国立博物館では展覧会開催をにらんだ効果的な文化財が収集されている。東京国立博物館で寄附金による購入なども行われているが、世論喚起などを通して、十分な購入予算を確保するとともに、寄贈、寄託の増加に向けた積極的な取組みが必要だと思われる。なお、文化財の購入に関しては、その必要性を十分にアピールするとともにそのプロセスの透明性も一層高められたい。

文化財の管理・保存・修復に関しては、建物の耐震化、九州国立博物館における X 線 CT スキャナー等の三次元計測装置により展示品の構造解明のような科学的な保存修復など着実

に実行されている。特に九州国立博物館では充実した施設を活用した計画的な修理が長期的な視野に立ってなされていると評価できる。保存カルテの作成状況についても、東京国立博物館でめざましい成果を上げているなど取り組みがなされているが、実績の評価という意味では、作成件数だけでなく、必要な全体量に対する達成状況などその進捗状況を示してほしい。また、各博物館では虫トラップ、温湿度データ管理、空気環境調査の解析等様々な活動を行っているが、それらが各博物館の中だけでしか活用されていないような印象を受ける。機構全体で情報を共有し、相互に検証しあうような体制が必要ではないだろうか。

文化財の収集・保存・時代への継承は全体としては十分な取り組みがなされているが、教育的な観点から文化財の大切さを伝える事も必要である。将来的には、このことが寄贈の増加にも繋がっていくと考える。

2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信

文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信は、順調に実施され、自己点検評価も概ね適正である。

平常展については、高校生の無料化などの取り組みは評価できる。東京国立博物館で開催された特集陳列「黒田清輝のフランス留学」は、東京文化財研究所所管であった黒田記念館保管作品を展示し、国立文化財機構として統合した成果の一端を明示したことは高く評価できる。今後も研究所と博物館の共同の発信の試みを期待したい。

特別展については、一般的に入館者が多く、機構内の連携も見られるようになってきている。混雑時における開館時間の延長などの取り組みも評価できる。東京国立博物館「薬師寺展」、奈良国立博物館「法隆寺金堂展」など入館者の多かった展覧会や東京国立博物館「対決展」や京都国立博物館「暁斎展」のような、新たな切り口やテーマを示す展覧会など意欲的な展覧会が多くあったことは評価できる。九州国立博物館「工芸のいま展」は入館者が目標に達しなかったが、地域とのつながりという博物館の新しい可能性を拓く試みとして評価できる。東京国立博物館「スリランカ展」も目標入館者数には達していないが、日本になじみの薄い地域の文化を紹介するという国際親善という意味で評価できる。今後も学芸員の調査・研究活動をベースとした新たな視点を掲示するような独自の展覧会に期待したい。展覧会の評価の方法については、各館ともに展示の質ではなく入館者数に偏重した評価が見受けられるので、そうならないような自己評価と評価基準の提示をお願いしたい。

海外展については、醍醐寺展、サムライ展のように海外に日本文化を発信しているという意味でも評価できる。今後は、国際的な評価も高い保存修復技術と融合させた展示や海外の博物館等と文化財を相互に貸与して展示する「交換展」などより積極的に取り組んでほしい。

学習機会の提供は、各館でシンポジウム、講演会、トークショーなどきめの細かい対応が図られている。展覧会においても九州国立博物館「大絵巻展」の大スクリーンの映像や絵巻を動かす体験キット、「国宝天神さま展」の「学習帳」など教育普及の工夫を凝らした充実ぶりが見られ、子ども達も楽しく観覧することができたと評価できる。

快適な観覧環境は外国語パンフレットの作成、外国語パネルの設置など外国人対応から点字解説の作成、オストメイト対応トイレなどのバリアフリー化対応まで行っており評価できるが、障害者対応はまだ不十分であるので、いっそうの整備に向けた研究が必要である。その他においては、東京国立博物館の如来像のレプリカは精巧にできており、立体のレプリカにととしてはこれまでに比して非常に良い出来である。

3 我が国における博物館のナショナルセンターとして博物館活動全体の活性化に寄与

博物館のナショナルセンターとしての取組みは図録など研究成果の発信、海外研究者の招聘やシンポジウムの開催、地方博物館・美術館への文化財の貸与など幅広く行っており評価できる。自己点検評価も概ね適正である。しかし、指導助言については、ナショナルセンターとしてさらに努力していただきたい。

海外の情報の受容という意味では、各施設とも国際シンポジウムを開くなど大きな成果があり、今後も積極的に海外の先進的な事例を紹介するなどして、ナショナルセンターとしての役割を果たしてほしい。一方の外国への情報発信機能は、出版物の外国語への翻訳を進めるなど積極的に進めてほしい。アブストラクト（要約）の英訳をインターネットに掲載するだけでも、海外からのアクセスに貢献できる。

研修事業については、修理や保存の技術的な研修のみになっているが、今後は展示企画、調査研究からボランティアの組織化にいたるまで、幅広い分野でのプログラムが検討されてもいいのではないかと。

4 文化財に関する調査及び研究の推進

文化財に関する調査・研究は全体として適正かつ活発に行われていると評価する。自己点検評価も概ね適正である。今後は4館2所の連携を高め、個人単位ではなく、組織としての協力した調査・研究が望まれる。光琳屏風の金箔の調査などは研究所、博物館のそれぞれの長所を生かして共同研究として取り組むならば、より短時間により効率的な成果を挙げることができるのではないだろうか。ただし、それぞれの研究目的が異なるため、その実現を図るために、6施設の会議の回数を現在より増やすなどして、連携を深めてほしい。

研究所の調査研究は、基礎的・先端的な文化財の調査研究の多方面にわたっており、充実した成果を上げていると評価できる。ユネスコの無形文化遺産保護条約の関係で無形文化遺産に関する関心が高まっているが、「文化的景観に関する調査及び研究」や民俗技術に関する調査・資料収集、無形文化財の保存活用に関する調査研究など有意義な研究がなされているので、今後の貢献に期待したい。近代文化遺産に関する調査も今後一層重要度が増すと思われるが、継続的に研究され、成果を上げており評価できる。今後はこれらの成果を各国事例との比較研究などを通して広く公開されることを期待する。

博物館における調査研究も限られた予算の中で充実した内容となっている。外部資金も19年度より活発に活用されている点は評価できる。京都国立博物館「近世絵画に関する研究」のような基礎的な研究から、東京国立博物館「文化財のトータルケアシステム構築に向けた応用研究」などの科学的な研究まで幅広く行われている。また、奈良国立博物館の韓国、中国との共同研究や九州国立博物館のタイ王国芸術局国立博物館事業局との共同研究などナショナルセンターとしての役割も果たしている。しかし、東京国立博物館「特別調査金地屏風の金箔地についての調査研究」のように緊急性があり、期待もされている調査が進捗していないことは残念である。

5 文化財の保存・修復に関する国際協力の推進

アジアを中心として行っている文化財の保存・修復に関する国際協力は、世界をリードする水準にあり、特にアンコール、スコータイ、竜門石窟、バーミヤンの各遺跡の調査研究は世界的にも高く評価されていると思われる。保存科学・遺跡調査は今後一層の進展および継

続的な実施が期待される。自己点検評価も概ね適正である。

また、諸外国の文化財保存修復専門家養成を積極的に進めており、高く評価される。とりわけ、アジア諸国における文化遺産を劣化から守るためには、我が国の貢献が期待されており、国立文化財機構へのアジア諸国関係組織の期待は大きい。在外日本古美術保存修復協力事業、ユネスコアジア文化センターへの研修協力など日本及び日本の文化財に対する諸外国からの理解を高めることに貢献している。国際協力は現地の調査からテキストの作成まで幅広い範囲で行われており、評価できる。

6 情報発信機能の強化

情報の発信機能については報告書や研究論集などの出版物が多様に刊行され、評価できる。このような刊行物を外部研究者や一般にも入手しやすいように、販売またはインターネットで全文公開することはできないか。また、調査・研究の成果を研究者向けだけでなく、一般向けに出版や展示施設の活用などの事業を通して、博物館と研究所で協力して情報を発信してほしい。

文化財防災情報システムの構築、各種データベースの作成、資料のデジタル化などの面では特に研究成果の発信が果たされているので、長期的な視点から、情報の更新・発信をお願いしたい。

情報の発信においては、日本語だけでなく、外国語による情報も充実してほしい。また、国別のアクセス件数を解析するは、今後の情報発信のあり方の再検討という意味で有効である。

マスメディアに取り上げられるような工夫が必要である。

7 地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上

地方公共団体等の文化財担当者に対する研修および連携大学院は長年の実績があり、安定した活動として大いに評価できる。今後は、専門的な調査・研究能力を活かして、高等教育への協力や学芸員・発掘調査担当職員等への研修・再検収の事業をさらに進めてほしい。博物館においても同様の取り組みはできないだろうか。

II 業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置

業務の効率化については、限られた予算、人員の中で高い成果を上げていると評価できるが、計量上だけでなく、質的な効率化を目指し、担当理事の設置や各施設間の連携体制の構築などを図ってみてはどうか。文書のペーパーレス化を考える際は、バックアップなどに気をつける必要がある。

光熱水量の効率化については、電気料及びガス料が原油等コストの急騰により金額ベースでは上昇しているが、使用量は順調に目標を達成している。なお、コストの削減は限界に近づいているようであり、今後は増加している施設の貸し出しによる増収方策を考える方が有効であるので、料金の設定を含め、再検討が必要である。なお、自己収入増大計画の具体的な数値目標を立てるためのワーキンググループが設けられたことは評価できる。

III 予算（人件費の見積もりを含む）、収支計画及び資金計画

運営費交付金が減少し続けているので、寄付金・入場料収入の有効活用や、競争的外部資金（科学研究費など）の獲得をさらに追求する必要がある。施設の耐震補強工事は順調に実

施しているが、奈良文化財研究所の改築計画などを含めた総合的な計画を策定していただきたい。

IV その他人事計画等

非公務員化のメリットを活かして、特殊技能を持つ人材を機構独自に採用できるようになっており、さらに20年度から任期付の研究員の人事制度が整備された。このことはより柔軟な人材活用ができるが、このような制度で採用された職員が他の職員に比べ、不利益をこうむらないよう配慮していただきたい。

人件費削減計画については、人事給与統合システムの稼働により、国立文化財機構全体として統一処理されるようになり、人件費の削減等の計画が円滑に企画できるようになったのはひとつの前進であるが、全体のバランスを配慮した計画を立てる必要がある。現在、人件費の削減は定年退職後の不補充と任期制の研究員の採用で対応しているようだが、人材育成という意味では、中長期的にはマイナス面が多くなってしまふことが危惧される。

なお、人件費の削減を図る際には、人員の削減や職員の給与の削減によって、職員が忙しさのあまり疲弊したり、モチベーションが低下したりすることがないように留意していただきたい。そのための職務給制度の導入は検討に値すると考える。

事務職員は、職員の意欲を高めるためにも人事交流は行うことは評価できるが、研究職員はそれぞれの専門分野があるので、それぞれの施設でどの専門が必要なのかよく勘案して新規採用、人事交流ともに行うべきである。

独立行政法人国立文化財機構外部評価委員会

- 委員長 清水 眞 澄（成城大学学長）
- 副委員長 横 里 幸 一（NHKプロモーション代表取締役社長）
- 委員 稲 田 孝 司（岡山大学名誉教授）
- 委員 岡 本 健 一（毎日新聞社客員編集委員）
- 委員 小 林 忠（学習院大学教授）
- 委員 佐 藤 信（東京大学大学院人文社会系研究科教授）
- 委員 酒 井 忠 康（世田谷美術館 館長）
- 委員 園 田 直 子（国立民族学博物館文化資源研究センター教授）
- 委員 竹 本 幹 夫（早稲田大学坪内博士記念演劇博物館長）
- 委員 玉 蟲 敏 子（武蔵野美術大学造形学部教授）
- 委員 野 口 昇（日本ユネスコ協会連盟理事長）
- 委員 藤 田 治 彦（大阪大学大学院教授）
- 委員 藤 好 優 臣（公認会計士）
- 委員 森 弘 子（福岡県文化財保護審議会専門委員）

独立行政法人国立文化財機構博物館調査研究等部会評価

部会長 小 林 忠（学習院大学教授）
 酒 井 忠 康（世田谷美術館 館長）
 藤 田 治 彦（大阪大学大学院教授）
 森 弘 子（福岡県文化財保護審議会専門委員）

独立行政法人国立文化財機構外部評価委員評価書

◎博物館調査研究等部会

外部評価委員名

小林 忠

1 総合的な事項

国立博物館4館における調査研究は、各館の特性を活かしながら多方面に展開し、それぞれにおいて充実した成果を上げている。しかもそれらが調査のための調査に終わらず、研究成果を各館の展示活動、教育・普及事業等に反映していることも高く評価される。さらに、国立博物館として海外諸国の博物館・美術館とも連携・協力して国際的な共同研究を積極的に展開していることにも敬意を表する。

予算や時間の制約がある中で困難も伴うことも多々あろうが、今後とも現在の積極的な姿勢を保って活動を持続していくことが期待される。

2 自己点検評価に関する事項

自己点検評価は、各館ともほとんどがA与えており、Bがわずかに見えるのみと、概して単調、かつ甘い。日常業務の繁忙の中で成果が上がりにくい場合はその理由を掲げて、CやFも有って良からう。そうした厳しい自己評価の姿勢と、その成果を得られなかった事情の洗い出しもまた、今後の国立博物館における調査研究活動の充実、発展のために肝要かと思われる。

3 調査研究に関する事項

・東京国立博物館

国の中央博物館として多数の学芸員を擁し、多数・広範な研究を展開していることは圧巻である。

しかしながら、一つ一つの事例が全て満足のいく成果を上げているとも思われず、真摯な自己評価をすべきようにも思われる。

例 「(4 5 1 1 0 3) 特別調査金地屏風の金箔地についての調査研究」

緊急性のある研究課題で成果が大いに期待されるにもかかわらず、実作を対象とした調査が年間に2度しか行われなかったのは誠に遺憾である。このような場合はほとんどの項目でFではないのか。

・京都国立博物館

京都地域の寺社(建仁寺両足院ほか)に関する文化財の悉皆調査に成果を上げてきたことを高く評価する。

しかしながら、全般に業務実績書および自己点検評価調書への自由表記が内容希薄で、取り組みに消極的な姿勢が見受けられるのは遺憾である。

・奈良国立博物館

中国、韓国の国立博物館と共同研究を行っている姿勢を高く評価したい。

・九州国立博物館

文化財の保存、修復に関する研究、その基礎となる素材に関する研究など、独自の調査研究に注目し、今後の成果に期待したい。

4 その他

独立行政法人となってから、国立博物館の公的な調査研究事業は目に見えて活発化したと、評価される。しかしながらその多くが、企画展を前提する課題であったり、日常業務と直接関わるものに関連したりして、学芸員からの自由で創造的な課題の追求が許されにくい傾向にありはしないだろうか。日常業務の繁忙を理由に個人の発意に基づく調査研究や知的追求がしにくい状況は、将来的には目に見えない形でマイナスの負荷がかかることと憂慮される。学芸員個々の研究時間の確保に配慮を望みたい。

独立行政法人国立文化財機構外部評価委員評価書

◎博物館調査研究等部会

外部評価委員名

酒井 忠康

1 総合的な事項

問題意識を明らかにして計画を立てた通りの実績を上げていると思う。ただ成果を前提とした小規模計画が多いのが気になる。

2 自己点検評価に関する事項

計画通り実施されており、概ね評価できる。

3 調査研究に関する事項

基本的に予算が少ないため科学研究費補助金に頼らざるを得ない状況は理解できるが、調査研究から学会発表や論文作成への進展は、個人的な能力を問われる。その点の危惧を若干感じる。

4 その他

A) 多種多様な業務にもかかわらず、丁寧な対応を心がけていて好感がもてる。しかし、人材の不足（特に研究領域）は否めない。

B) 大型プロジェクトを企画して国内外の研究者を大勢参画させる機会を持つ必要がある。余りにも細分化した仕事ばかりなのではないだろうか。

独立行政法人国立文化財機構外部評価委員評価書

◎博物館調査研究等部会

外部評価委員名

藤田 治彦

1 総合的な事項

東京、京都、奈良、九州の4国立博物館をあわせて（独）国立博物館が成立し、さらには（独）文化財研究所との統合により（独）国立文化財機構となっはじめての初めての外部評価、総合的な評価の実施であり、それに先立つ、自己点検評価など、これまでにない配慮が必要だったのではないかと想像する。組織改革の途上でのこの種の評価の実施はどの部局にとっても大きな負担であったらうと思うが、有形文化財を収集・保管して国民および世界の人々への観覧に供するという4博物館の役割は、継続的かつ順調に果たされている。

2 自己点検評価に関する事項

自己点検評価報告書は全般的によくできており、各館における活発な活動が伝わる。ただし、業務実績書、自己点検評価調書ともに記入不足で、判断が困難な事業も含まれる。それらの事業の内容自体は優れたものである場合もあるのだが、それが適切に記述されなければ内容は伝わらない。かたちだけのものにならないよう、自己点検評価報告書のありかた、外部評価委員への送付の時期、日時を含む外部評価委員会の設定のしかた等、もう少し工夫ないし配慮が必要であらう。

3 調査研究に関する事項

東京国立博物館における漢籍・洋書の悉皆調査は非常に価値がある。将来的には情報アーカイブで公開を予定しているとのことだが、早期実現を期待したい。同館を中心とした、東アジアの書道史における料紙と書風に関する基礎的研究も注目される。文化財のトータルケアシステム構築に向けた応用研究の実施も有意義である。

京都国立博物館における、京都を中心とした近畿地区の社寺文化財の調査は、長く行われているものだが、学術的にも、文化財の現状を把握し保存に役立てるという意味でも、極めて重要である。建仁寺土蔵の典籍の調査等がとくに注目される。

奈良国立博物館においては、日本における仏教美術の展開と、中国および韓国の仏教美術が及ぼした影響の研究が、両国との研究員の交流等も含めて、活発に展開されている。

九州国立博物館においては、有形文化財の保存修復に関する分析的かつ実践的研究が充実している。文献を重視した歴史的研究も行われつつあり、今後の進展が期待される。

4 その他

展覧会に関しては、海外における日本の文化の紹介にもさらに力を入れてほしいが、国内の展覧会は各館それぞれに充実し、入館者が極めて多いものもある。ただし、あまり入館者数に気をとられることなく、各館が一層独自性を発揮すべきだろう。4国立博物館はすべて「設置されている地方を代表する国立博物館」であり、「日本を代表する博物館」であり、「世界の主要博物館のひとつ」でもある。したがって、設置された土地だけに固執する必要はない。しかし、東京でも九州でも例えば近畿の社寺文化財等の展覧会が常時主体となるようなことになれば一京都と奈良は当然近畿の文化財を中心にしており一国全体としてのバランスに欠ける。関東・東北・北海道の文化財の調査・研究・保存・展観をリードするのは、規模からしても、東京以東に国立博物館が開設されていない現状からしても、やはり東京国立博物館であろう。九州国立博物館は、地元福岡県を重視する十分な理由はあるが、九州には、大分、宮崎、鹿児島、熊本、長崎、佐賀と、多様かつ重要な歴史と文化があり、その役割も一層意識してほしい。四国や中国地方はどうか。

(独) 国立博物館さらには(独) 国立文化財機構の成立が、人員削減や経営の合理化といったことではなく、日本の博物館自らが、日本やアジア、あるいは東京、京都、奈良、九州(福岡)を中心としながらも、世界全体を国際的視野で見ることにつながる、といった積極的意味で考えられるようになると有意義であろう。1991年にヴェネツィアで開催されたケルト展のように、意外であると同時に十分な意味や背景があり、その後10年も20年も全世界に影響を与え続ける展覧会が、国立文化財機構の博物館から生まれることを期待している。

独立行政法人国立文化財機構外部評価委員評価書

◎博物館調査研究等部会

外部評価委員名

森 弘 子

※事項ごとに評価コメントを記入

1 総合的な事項

各館ともあらゆる面に於いて大変努力されていると感じられる。それは今回説明のあった「調査研究に関する事項」においても、展示の基礎となる有形文化財に係わる調査研究のみではなく、公衆への観覧を図る為の研究という課題があることから窺われる。こうしたことを通じて、国立博物館が国民にとってますます身近なものとなり、何度でも足を運びたい場所となっていることは事実であろう。

2 自己点検評価に関する事項

今回から、自己点検評価調書記入の観点や基準値が明確に示されたため、記入する職員にとっても評価委員にとっても、評価内容が理解しやすくなったと思う。

効率性、調査回数などで一部B判定がみられるものの、他の項目についてはほとんどA判定であるのは、職員の努力の賜とも思えるが、独創性の部分では、必ずしも独創的でなくとも、地道な基礎作業というべきものも必要であり、現にそうした部類に入ると思われる研究についてもすべてA判定になっているのは如何であろうか。

3 調査研究に関する事項

館独自の研究の他に、科学研究費補助金等による研究、企業、海外の博物館との共同研究など、外部資金投入による研究が、前年に比しより活発に行われ、良い成果が上げられていると感じられる。

資金的な活性化とともに、人的にも他館との共同研究、外部研究者との共同研究が活発に行われることにより、博物館の知的財産の蓄積が着実に行われていることは喜ばしいことである。日々行わなければならない展示等、館本来の業務との兼ね合いも大変なことと思われるが、可能な限りこうした調査研究が活発に行われることを期待する。

先端の科学技術を駆使した文化財の調査、あるいは技術そのものに関する研究が多くみられた。機器類は高価なものが多く、予算の手当等容易ではないと思われるが、導入できている館は責務としてさらに研究を進め、その情報を法人全体のものとして、あるいは地域博物館等とも共有し、今後の文化財の研究、保存のために資されることを望む。

国内の博物館の支援とともに、海外の博物館との共同研究、また支援にも意を注いだ研究がめだち National Museum としての役割をよく果たされていると感じられる。ことに九州国立博物館のタイ王国芸術局国立博物館事業局との共同研究は、文化財の保存によって地域活性化をはかるという、人びとの生活に直接コミットしたテーマであり、文化財の果たす役割の可能性を広げるものとして注目され、それが国際貢献という場でなされていることに大きな意義を感じる。

東京国立博物館の下総国下河辺庄の中世的景観の復元の研究に興味を覚える。古代遺跡等の考古学的研究による復元ジオラマ等はよく目にするが、文書、古地図、寺社など広汎なア

アプローチによって、詳細かつ正確な景観が復元され、展示にも活用されることを期待したい。

京都国立博物館の「近世絵画に関する調査研究」では、暁斎のような比較的知られていなかった画家について光を当て、予想以上の反響を得られたという。こうした新しい発掘にも努力されたい。

直接入館者数に結びつかない地味な研究であっても、常設展示の一部、あるいはスポット展など、何らかの方法で、国民に還元することを考えるべきであろう。

4 その他

九州国立博物館の IPM ボランティアをされた方々が、NPO 法人を立ち上げられたことは素晴らしいことであり、今後とも連携しながらこの活動が広がっていくことを期待したい。

収蔵品の購入についてのルールと価格の決め方についてご説明願いたい。一部マスコミ等で問題にされたが、それを受けてどう対処されたか、改善されたかお伺いしたい。

独立行政法人国立文化財機構研究所調査研究等部会評価

- 部会長 佐藤 信（東京大学大学院人文社会系研究科教授）
- 稲田孝司（岡山大学名誉教授）
- 岡本健一（毎日新聞社客員編集委員）
- 園田直子（国立民族学博物館文化資源研究センター教授）
- 竹本幹夫（早稲田大学坪内博士記念演劇博物館長）
- 玉蟲敏子（武蔵野美術大学造形学部教授）
- 野口 昇（日本ユネスコ協会連盟理事長）

独立行政法人国立文化財機構外部評価委員評価書

◎研究所調査研究等部会

外部評価委員名

佐藤 信

1 総合的な事項

- 基礎的・先端的な文化財の調査研究の多方面にわたり、期待される成果を十分に挙げていると評価できる。中期計画の実施状況もきわめて順調である。研究成果の発信には十分な努力が為されているものの、せつかくの大きな実績が広く周知されていない面があり、研究者のみでなく国民全般に対して十分に発信するという面でさらに努力の余地もあるように思う。
- 「年度計画」が、国立博物館については各館ごとの計画が分かる記載なのに対して、研究所については各所ごとの記載が見えにくくなっているのを、明示してほしい。

2 自己点検評価に関する事項

- 限られた人員・予算の割に大きな実績を挙げていると思われる業務が多くあったが、人員・予算面での「効率」を評価の対象として比較する方法はないものか、お考えいただきたい。
- 特許の取得や外国政府からの受賞があったが、その他論文書評や新聞報道件数など、この外部評価以外の他者からの評価についても、可能な範囲で情報を提示していただきたい。
- 受託事業のほか、科学研究費などの獲得件数・金額なども実績として評価対象に加えてよいのではないか。
- 外部評価は機構諸館所の業務を向上させるためのものであり、自己評価ではできるだけ定量評価を詳しく記載していただきたい。その際、不本意な実績の数値であってもすべて正確な提示に務めていただきたい。

3 調査研究に関する事項

- 基礎的・先端的な文化財の調査研究の多方面にわたり、十分に成果を挙げていると評価できる。
- 同じ国立文化財機構の中の機関として、所員・館員どうしの私的な交流のみでなく、研究所と博物館とが協力して調査研究成を行うタイプの事業はできないか。
- 関連する学会への様々な形の協力も、実績として評価してよいのではないか。

4 国際協力の推進に関する事項

- 東京・奈良の文化財研究所とも、文化財保存のための調査研究や修復に関する国際協力では、多分野にわたり、日本の研究所ならではの質の高い実績を挙げており、高く評価できる。
- 国立文化財研究所において、世界文化遺産に関する調査・研究を推進することはできないか。

5 調査研究成果の発信に関する事項

- 研究所の報告書・研究論集などの出版物が多様かつ大量に刊行され、成果の発信となっていることは大いに評価できる。こうした刊行物が、入手しにくい外部の研究者や一般にも販売されるようにはできないか。販売が困難なら、PDFで全文公開することなどはできないか。
- 調査研究の成果を、研究者向け報告・論文のみでなく、一般国民に対しても分かりやすい形で出版するなど、発信していただきたい。また、研究所の展示スペースの活用のほか、外部の各地の博物館等での展示とか、大学の「オープンキャンパス」に似た公開事業などはできないか。
- 同じ国立文化財機構の中の研究所と博物館とが、調査研究成果の発信事業を協力して行うことはできないか。

6 国、地方公共団体等に対する協力・助言等に関する事項

- 国・地方公共団体等に対する協力・助言では、委託されたものなど多分野で高レベルの大きな実績を挙げていることは、評価できる。
- 国立文化財研究所で、文化財研究における高いレベルを活かした高等教育への協力をさらに進めていただきたい。また、これに加えて初等・中等教育の学校教育との連携をも、進められないものか。東京国立文化財研究所が小学生向けの事業紹介パンフレットを作成・配布したことは良かったと思う。

7 その他

独立行政法人国立文化財機構外部評価委員評価書

◎研究所調査研究等部会

外部評価委員名

稲田 孝司

1 総合的な事項

研究所は、歴史・考古学・建築史・美術史の研究から文化財科学にかかわる種々の研究分野まで、高度な研究を精力的に継続しており、とりわけ特許が成立した年輪年代学研究の成果は高く評価される。年輪年代学は日本へ本格的な導入が行われておよそ 30 年になり、めざましい成果を上げてきた分野だけに、国内の複数機関で競争的研究あるいは分業的・協業的研究が行えるよう裾野の拡大に努めることが今後の大きな課題となろう。そうした努力はすでに始められつつあるとのことだが、この分野に限らず、研究所で得られた研究成果や新しい研究手法等を国内の学界や関係機関にすみやかに伝えてひろく活用に供し、国際的な場においてもそれを多面的に役立てていくことが国独立行政法人としての研究所の基本的な役割と考えられ、この面でも東京・奈良の両研究所は本年度において多くの実績を残したといえる。

2 自己点検評価に関する事項

研究・業務部門ごとにまとめて説明する今回の部会運営方法は、時間のうえでは適切であった。ただ、来年度も同様に行うのであれば、研究・業務部門ごとにまとめた事業一覧もあわせてつけたほうがよい。

3 調査研究に関する事項

国際研究集会「オリジナルの行方—文化財アーカイブ構築のために」(No.67)は力のこもった企画で、多彩な発表と討論の成果が伺える。近代の文化遺産の保存修復に関する研究(No.41)は、鉄構造物をとまなう文化財が我が国文化財保護の歴史のなかでは新しい対象物件であるだけに、その保存・修復・活用にかかわる技術的な問題の解決が急がれており、時宜にかなって各方面からの期待も大きいと思われる。古社寺所在寺社の歴史資料調査(No.6)や『平安時代庭園に関する研究2』の刊行(No.22)などは、地の利を得て研究所らしい着実な成果といえる。平城宮第一次大極殿院回廊跡の調査(No.9~13)が完結したことは今後の整備等とのかかわりで意味があり、藤原宮朝堂院において朝廷儀式の新たな資料をえた(No.16)意義は大きい。甘樫丘東麓遺跡は蘇我入鹿邸宅ではないかと喧伝されるなかで、予断を排し客観的な歴史資料を得るためであったとすれば、今回の発掘調査(No.18)において調査期間の延長を工夫することなどにより遺構の精査に努めたことは着実な姿勢といえよう。

4 国際協力の推進に関する事項

歴史・考古学研究と文化財保護にかかわるアジア諸国を中心とした国際協力(No.23・39・40・44~51)については、例年通り意欲的に多彩なプロジェクトとして実施され、十分な成果をあげた。紛争等により日本から現地入りができない場合は関係国の研究者・技術者を研修の形で受け入れるなど、柔軟な対応がなされている。また、若い研究者を現地に長期滞在

させて共同研究の深化と現地語の習得等をはかったことは、限られた職員数の条件下で研究所の他分野にも負担のかかる工夫ではあろうが、将来の長期的な国際協力の発展を見通した場合には十分意義があるといえよう。

5 調査研究成果の発信に関する事項

研究成果に基づく諸学会での発表、公開シンポジウムの企画、黒田記念館・飛鳥資料館など種々の場での展示活動、発掘調査現場における現地説明会開催、報告書や種々の印刷物の刊行、ホームページの活用、マスメディアへの情報提供等々により、質的にも量的にも十分な発信が行われている。中学生の職場体験の受け入れやキッズページの試作なども意義がある。

6 国、地方公共団体等に対する協力・助言等に関する事項

地方公共団体に対する研究・技術上のアドバイスでは、十分な貢献を行っている。国に関しては、とくに高松塚にかかわって果たした役割が大きい。

7 その他

特になし。

独立行政法人国立文化財機構外部評価委員評価書

◎研究所調査研究等部会

外部評価委員名

岡本 健一

1 総合的な事項

長期・単年・緊急の課題とも、着実に遂行され、成果をあげていると認められます。ひきつづき職務に精励され、国家・社会の負託に応えられるよう期待します。

今年度は従前の「業務運営の効率化に関する事項」が入っていませんが、昨秋来の厳しい経済環境のなか、かぎられた予算と人手で、ふくれる需要（プロジェクト）にいかにかつ率的に対処するか、変わらぬ課題として追求されることを望みます。

2 自己点検評価に関する事項

膨大な時間を要する自己点検評価ですが、独法立ち上がり当時の、あの一種爽快な緊張感をもって、ひきつづき遂行されるよう期待します。

外部評価の進め方は、現行（国立文化財機構）の総合評価法が望ましいと考えます。文化財研究所時代の厳密な逐条判定法は、間接的であるだけに、教育現場の成績判定よりむしろかく、心身のストレスをつよく感じたからです。

3 調査研究に関する事項

飛鳥のイメージを一変させた石神遺跡の調査が一段落し、報告書のまとめにかかるとのこと。画竜点睛、学界・社会の大きな期待と関心に応じてほしい。同時に、次の「花のあるプロジェクト」を創出・挑戦し、広く社会にワクワクするような興奮を喚び起していただきたい。

今年度は自己評価Sが3件（年輪年代法の成果と平城宮大極殿扁額の復元研究、遺跡の探査）にとどまり、昨年度と比べてやや謙抑的ですが、地の塩のような地味な仕事（古社寺の古文書調査、庭園研究など）の、将来の大成も注目されます。

4 国際協力の推進に関する事項

広い地域、様々な材質の文化財について国際協力し、保存修復の科学・技術をよく伝習されている。また、文化財保存修復国際研究集会の報告書では、壁画保存計画策定の事例集がまとめられたという。高松塚壁画の教訓も世界の壁画保存に活かされれば、国際貢献とともに、高松塚の墓主と壁画への供養になりましょう。

5 調査研究成果の発信に関する事項

年輪年代測定の新技術が迅速に特許取得を果たし、他の年代測定法とともに顕著な成果をつぎつぎにあげられた。関係者の長年の精進研鑽と創意発明によって築かれた、輝かしい金字塔です。しかし、邪馬台国問題ともからんで、一部で根強い反発も募っています。今後とも啓発活動や実績の積み重ね、情報公開によって、不動の信頼を確立されるよう期待します。

6 国、地方公共団体等に対する協力・助言等に関する事項

多岐にわたって適切に協力・助言されています。なかでも、文化財の防災こそ喫緊の重要課題である、と再認識させられました。国の文化財防災会議など関係機関、地方公共団体、民間NGOとも連携して、重大な使命を果たしていただきたい。

7 その他一部会の進行について

全体に「ポイントを押さえて要領よく、かつ丁寧に」説明されたが、部署ごとの担当＝進行表を配布していただくと、もっとスムーズに聴き取れたでしょう。たしか数年前まで用意

してあったと記憶します。

独立行政法人国立文化財機構外部評価委員評価書

◎研究所調査研究等部会

外部評価委員名

園田 直子

1 総合的な事項

各担当部課が数多くの事業を実施しながら、いずれにおいても十分な成果をあげており、大いに評価できる。ただ現在のフォーマットでは、プロジェクトごとの成果は十分に把握できるが、その間の関係が見えづらい。たとえば、担当部課間にまたがった活動、東京と奈良の文化研究所が協力した活動、さらには、文化財研究所と国立博物館との協力体制などの点もさらに強調していただけると、研究所の活動が、より一層、総合的に見えてくると思われる。

2 自己点検評価に関する事項

特許取得したプロジェクト（非破壊年輪年代測定法）の「S」判断は適切と考える。このような業績は、基礎データを継続的に蓄積しレファレンスを作成するという、地道な研究が実を結んだものである。現在「A」評価の基礎研究のなかにも、今後このように発展しうる可能性を秘めたプロジェクトがあると推測でき、期待している。

3 調査研究に関する事項

発表論文や報告集など実績値が多く、全体的に活発な研究活動が行われており、評価できる。

文化的景観や民俗技術、近代文化遺産といった、今後、重要性が一層増すことが予測できる分野の研究が継続実施され、成果を上げている。また、高松塚古墳・キトラ古墳における劣化防止対策は、模擬壁を用いての措置法が確立したということで、着実に効果を上げている様子がうかがえる。非破壊年輪年代測定法や小型可搬型機器での材質調査など、文化財の非破壊調査法に関わる研究において顕著な実績をあげるとともに、デジタル画像での応用調査、新たな保存技術の開発、生物劣化対策、保存・周辺環境調査、文化財修復材料調査など、幅広い分野に意欲的に取り組んでおり、ナショナルセンターとしての役割を十分に果たしている。保存環境研究は、博物館と研究所が一緒に取り組んでいるテーマという点でも注目しており、今後の展開を期待している。

4 国際協力の推進に関する事項

「紙の保存と修復」国際研修、在外日本古美術品保存修復協力事業、ユネスコアジア文化センターへの研修協力はいずれも、日本および日本の文化財に対する理解を諸外国で高める一翼を担っている、重要な事業である。文化財の保存・修復に関する国際協力は、アジアを中心に数多く実施されており、現地での調査・実験にとどまらず、人材育成、研究会開催、DVD映像やテキスト作成と幅広い内容になっていることも評価できる。

5 調査研究成果の発信に関する事項

文化財防災情報システムの構築、各種データベースの作成、資料のデジタル化など、研究

成果の情報発信に積極的に貢献している。このような活動は、順次、データを追加していくことで内容が充実していくので、長期点視点からの成果更新、発信をお願いしたい。また、研究論文集、報告書、年報、図録等の刊行をはじめ、各種研究集会や講演会、現地説明会、展示公開も活発に行われている。

日本の「文化財保護法」英訳の出版は、非常に意義深い。是非とも、多くの研究者に活用してもらえよう、一般に公開していただきたい。

6 国、地方公共団体等に対する協力・助言等に関する事項

昨年度同様、地方公共団体等が実施する事業への援助・助言は、文化財、建造物・遺跡等の有形文化遺産のみならず、無形文化遺産も対象としており、各分野でバランスよく展開されている。

博物館・美術館等の保存担当学芸員研修や、埋蔵文化財担当者研修などを通じて、国内で各種文化財に関わる人びとの知識や技術の総合的なレベルアップに寄与している。さらには連携大学院教育で、次世代の人材育成に貢献している。

7 その他

特になし。

独立行政法人国立文化財機構外部評価委員評価書

◎研究所調査研究等部会

外部評価委員名

竹本 幹夫

1 総合的な事項

全般にわたりきわめて充実した活動が繰り広げられており、問題とすべき点はとくに認められない。調査研究・国際協力・成果発表・情報発信・国や地方公共団体等に対する助言の全分野にわたり、すぐれた治績を上げたことが確認出来る。

2 自己点検評価に関する事項

目標はすべての点にわたり達成されており、一部の分野では目標を上回る成果があったことは高く評価出来る。なお自己評価の方法そのものが非常に洗練されており、学ぶべき点が多かったことを付言したい。

3 調査研究に関する事項

東京文研・奈良文研いずれも高度な研究がなされた。とくに評価者が担当した調査研究等部会の内で、東京文化財研究所の無形文化遺産部については、民俗技術の保存伝承までも含む広汎な分野をカバーしていながら、いずれの分野においてもかなりの成果を上げており、高く評価出来る。

全般に年報・紀要類には学界をリードするような高水準の論考が少なくない。また充実した施設・設備と人材を活用した共同研究体制は、わが国の文化財調査研究の優れた能力を証するものといえよう。小中校生徒に対する広報活動も、こうした専門的機関では難しい課題と思われるが、努力と工夫が認められる。

4 国際協力の推進に関する事項

アジア地域を中心とする国際協力にとくに注目すべき成果があった。保存科学や遺跡調査に関する活動には目を見張るものがあり、今後一層の進展が期待される。保存・修復技術の進歩も、世界をリードする水準にあるとあってよい。

5 調査研究成果の発信に関する事項

多数の紀要・研究報告書等の刊行に加えて、それらをホームページでも閲覧出来る体制を取っているのは、今後の紀要類の成果発表方式を先取りしたものと評価出来る。ホームページの閲覧件数が伸び悩んでいるようであるが、逆に閲覧時間は増大している由であり、研究者による利用が着実に増加していることが推察される。

6 国、地方公共団体等に対する協力・助言等に関する事項

件数としては必ずしも多くないが、これは依頼する側の問題であり、研究所としての責務は十二分に果たされていると認められる。依頼件数を伸ばすためには、ダイレクトメールやポスター送付による直接的な広報などが考えられるが、予算もあることであり、現状は対応する価値のある助言や協力の依頼が中心を占めているようであるから、今後あえて相談件数

拡大に努める必要はないように判断される。

7 その他

わが国の文化財行政の充実ぶりを実感できる活動が多く、非常に参考になった。組織として体系立った活動を展開していることが、確実な成果を生んでいると評価出来る。

独立行政法人国立文化財機構外部評価委員評価書

◎研究所調査研究等部会

外部評価委員名

玉蟲 敏子

1 総合的な事項

- ・ 今回の委員会では奈良・東京ともに事項ごとにまとめて報告をしていただけたので、年間の事業の全体が具体的に把握でき大変に助かった。
- ・ 全体的に、昨年度は東京・奈良それぞれの事業は継続されたものを順調に進展させており、守成の時期であることが分かった。
- ・ ただし、一般人にこのような分野の仕事に対する理解を深めてもらうためには、やはり話題性、訴求性、時宜性が必要である場合もあるので、そうした部分について視野が開かれていてよいのではないかと思われた。

2 自己点検評価に関する事項

- ・ 自己評価およびプレゼンの表現方法については、奈良・東京それぞれに個性があり、平準化して理解するのがなかなか難しいが、東京については、自己評価に対してやや謙虚になりがちのような印象を受けた。
- ・ Sの連発された昨年度に比べ、今回は定性的、定量的評価はともにAが多く、高望みはないが順調で安定性のある活動が行われたことがよく理解できた。

3 調査研究に関する事項

- ・ 奈良・東京ともに概ね順調に進んでおり、安定感がある。
- ・ とくに奈良の年輪年代法、東京の高精細デジタル画像による文化財の調査などの独自の方法による調査研究が光っている。
- ・ ただし独立行政法人という立場から、閉鎖性や独りよがりにならないよう、充分配慮して頂きたい。
- ・ 東京の高精細デジタル画像による調査は順調に用例を増やしており、点から面につながる発展への意欲があるものとして評価したい。
- ・ 地震や剥離など文化財の保存に向けた調査・研究など、両組織の意義にも関わる分野について自覚的に推進している。

4 国際協力の推進に関する事項

- ・ 奈良・東京ともに、従来からの事業の枠組みを守り、順調に推進されている。
- ・ 日本と関係の深い東アジア、東南アジア、西アジアへの協力が特徴的であるが、このような継続性の高い事業の展開で築かれた信頼関係がますます積み重ねられ、強固になるように期待したい。

5 調査研究成果の発信に関する事項

- ・ 東京のウェブを用いた情報発信は、次世代の国民となる児童にも視野を広げており大変

- ・ 奈良の遺跡の露出公開に関する調査研究も、情報発信を重くみての視点として理解できる。
- ・ 奈良の厚みがあるものの、発信対象が従来の層にやや偏りがちな傾向に対して、東京は万遍なく行き届いている印象がある。

6 国、地方公共団体等に対する協力・助言等に関する事項

- ・ 国や地方行政組織にたいする協力・助言もまた、奈良・東京とも伝統的ともいえる事業の厚みがあり、安定した活動となっている。
- ・ 連携大学院なども次世代の教育として重要な事業であるが、それを受講した院生たちの進路についても今後のあり方を考える上で追跡調査があってもよいのではないか。また連携する大学院の範囲を広げていくことを模索する必要はないのだろうか。
- ・ 地方公共団体の博物館・資料館に配属される保存担当者の講習、フォローアップは基盤の整備として重要な事業であるが、機関自体の存続が危ぶまれている現況であるにも拘わらず、順調に推進されていることに好印象をもった。

7 その他

- ・ 例えば、東京の無形文化遺産部が行っている工芸技術の保存などは、ある時点において有形の保存事業と連携をとらざるを得ない状況が起こってくると思われるが、将来のそうした場合に備える検討が今後なされるよう期待したい。

独立行政法人国立文化財機構外部評価委員評価書

◎研究所調査研究等部会

外部評価委員名

野口 昇

1 総合的な事項

平成 20 年度においても、これまでに続いて、東京・奈良の両研究所が、有形・無形の文化財を対象として、多分野にわたる調査、研究、研修、国際協力などの事業を積極的に推進されたことを先ず高く評価したい。

高松塚・キトラ両古墳壁画の保存処置に関し、前年度に引き続いて貴重な貢献がなされた。とりわけフォトマップ資料の完成は特筆に値すると思われる。

文化財保護の国際協力を含め、両研究所の諸事業は、国の政策を反映した極めて重要なものであることを改めて認識した次第である。

2 自己点検評価に関する事項

事業実施状況に照らし、各プロジェクトの自己点検評価は適切になされていると思われる。

3 調査研究に関する事項

国際研究集会の開催を含め、多分野にわたる貴重な調査研究が継続実施されていることを評価したい。

ユネスコの世界遺産登録で関心の高まっている「文化的景観」については、四万十川流域に関するケース・スタディなどを踏まえて、今後、各国の事例との比較研究をさらに深めて、その成果を広く公開されることを期待する。

文化財の価値形成に係る“オリジナル”に関する研究、文化財の非破壊調査法の研究、生物劣化対策の研究、防災計画に関する調査研究など多彩な調査・研究が実施されたことを評価したい。

無形文化遺産の保護に関して、民俗芸能や民俗技術などが取り上げられてきたことは有意義な進展であると考えられる。また、ユネスコの「無形文化遺産保護条約」の発効に伴い、今後、我が国からの登録申請が重要な課題となると思われるが、この分野での両研究所の貢献がさらに重要となろう。

4 国際協力の推進に関する事項

カンボジアのアンコール、タイのスコータイ、中国の竜門石窟と敦煌などの海外の文化財保存に関し、20年度においても、有意義な国際貢献が続けられてきた。特に、アフガニスタンのパーミヤン遺跡の調査研究や人材育成事業は世界的にも高く評価されてきていると思われる。なお、アフガニスタンやイラクの文化財保存については、治安上の制約から現地での調査研究が困難で、日本での研修等に重点が置かれているのは止むを得ないことであろう。

また、在外日本古美術品保存修復の協力、「紙の保存と修復」などの国際協力、諸外国の「文化財保護関連法令シリーズ」の刊行、日本の文化財保護法の英訳なども重要と思われる。

5 調査研究成果の発信に関する事項

「年報」、「概要」、「ニュース」の広報三誌は継続して刊行されている。「保存科学」、「美術年鑑」、「美術研究」などの刊行も順調に実施されたと思われる。また、有形・無形の文化財の画像のデジタル化が引き続いて進められ、多様なデータ・ベースが作成されていることを評価したい。

小・中学生向けの親しみやすい広報資料が作成されたことも評価したい。

6 国、地方公共団体等に対する協力・助言等に関する事項

国の機関や地方公共団体などの要請に応じ、必要な協力や助言が提供されてきたと思われる。ACCU（ユネスコ・アジア文化センター）との国際研修事業の共同実施も評価したい。

なお、国の困難な財政状況を考えると、今後、外部からの受託事業の拡充がさらに重要になってくるとと思われる。受託事業のさらなる発展を期待したい。

7 その他

我が国は、今後、文化発信能力を高め、広義の文化面での国際協力を一層強化することが求められていると思われる。両研究所は、このための重要な拠点の一つとして、益々重要な役割を果たしていくことを期待したい。

この観点からも、関係の民間財団等も取り込んだ「文化遺産国際協力コンソーシアム」の役割は重要であり、具体的活動の拡充を望みたい。

東京文化財研究所は、近く80周年を迎えるものと思われるが、この機に、両研究所の重要な役割と貴重な貢献にさらなる関心が向けられることを願うものである。